

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和3年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第5号（8月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

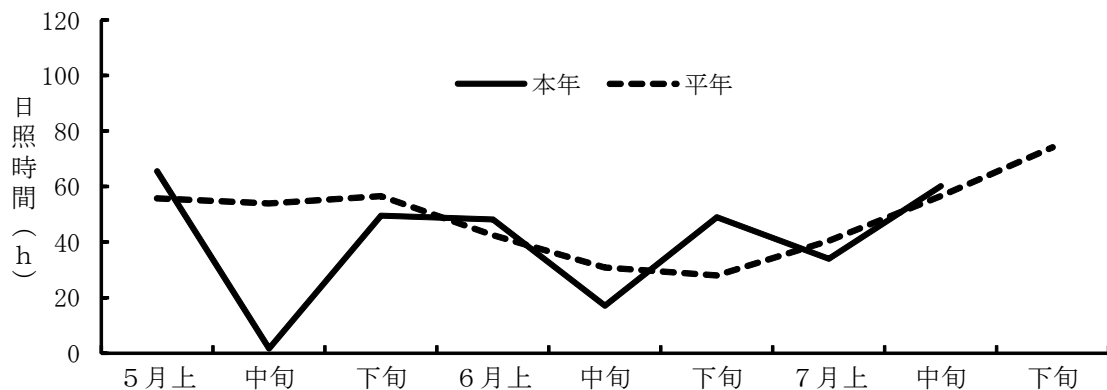
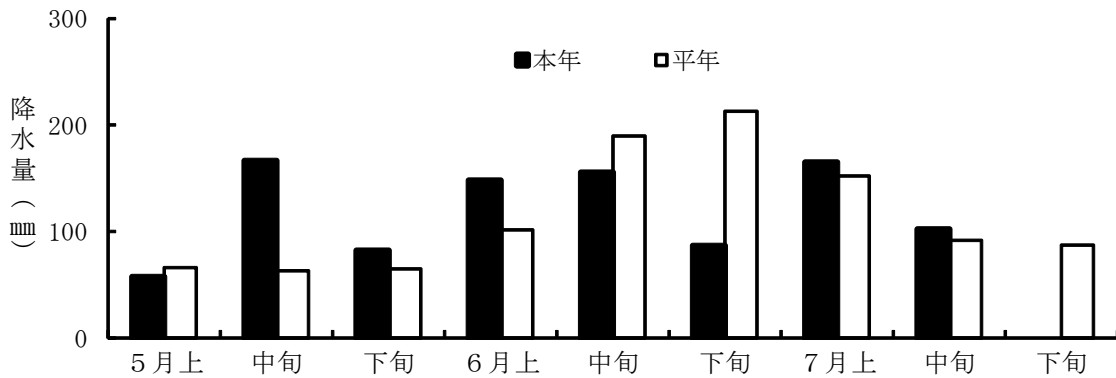
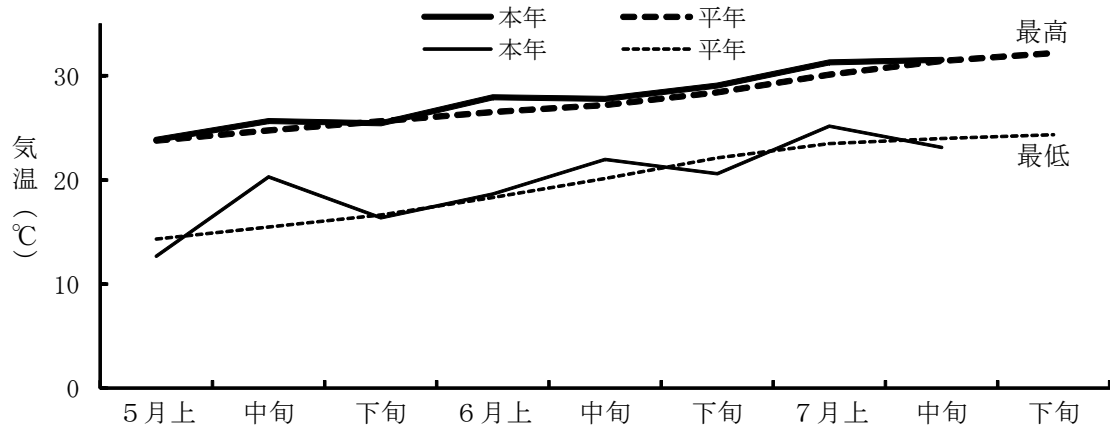
農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（7月31日から8月30日） 令和3年7月29日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	30	40	30	九州南部では、気温、降水量、日照時間ともに平年並みの見込み。奄美地方では、気温は平年並みか低く、降水量、日照時間は平年並みの見込み。
	奄美地方	40	40	20	
降水量	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	30	30	40	
日照時間	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	40	30	30	

II. 5～7月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	普通期水稲	葉いもち	やや少	並
		穂いもち	—	並
		紋枯病	並	並
		トビイロウンカ	少	少
		コブノメイガ	少	少
	サツマイモ	ナカジロシタバ	やや少	やや少
野菜	イチゴ（苗床）	炭疽病	並	並
		ハダニ類	並	並
	サトイモ	疫病	やや少	並
		ハスモンヨトウ	やや多	やや多
花き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	やや少	やや少
		アザミウマ類（県本土，施設）	多	多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊本地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	並	並
		黒点病（県本土・熊本地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊本地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
茶樹	チャ	炭疽病	やや多	やや多
		新梢枯死症（輪斑病菌による）	並	並
		網もち病	多	多
		チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少
		チャハマキ	並	並
		チャノホソガ	並	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	並	並
		チャノキイロアザミウマ	少	少
		カンザワハダニ	やや多	やや多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 普通期水稲

(1) いもち病

ア 予報内容

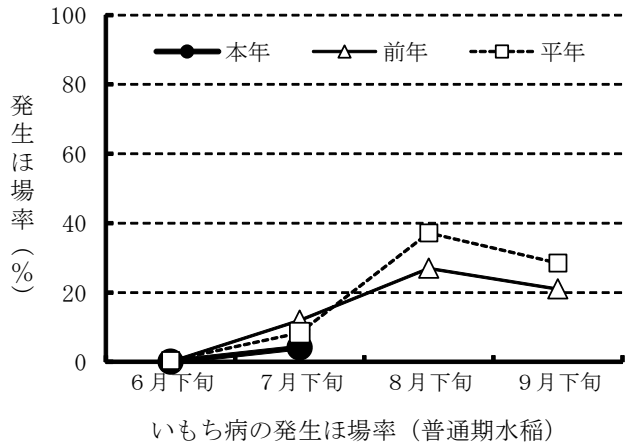
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 葉いもち：並
穂いもち：並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率4%（平年7%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 上位葉への発生が認められる場合は、
粉剤または液剤で早急に防除を行う。
- (イ) 粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期～穂揃期に行う。
- (ウ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。
常発地や葉色が濃いほ場では、穂肥の施用は控える。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

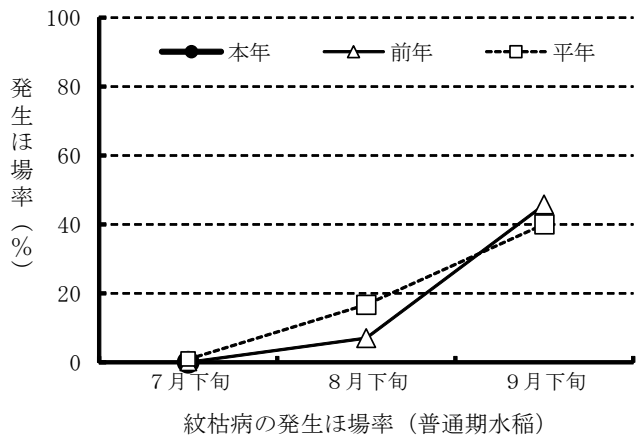
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率0%（平年0.9%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 早生種では出穂前1週間～出穂期，中
晩生種では出穂前1～2週間の防除に重
点を置く。
- (イ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので，地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。
- (ウ) 紋枯病が発生している水田では，出穂後も病斑の進展に注意する。



(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率0%（平成13%）：低
60W水田予察灯での5～7月の誘殺
虫数0頭（平成68頭）：少（－）

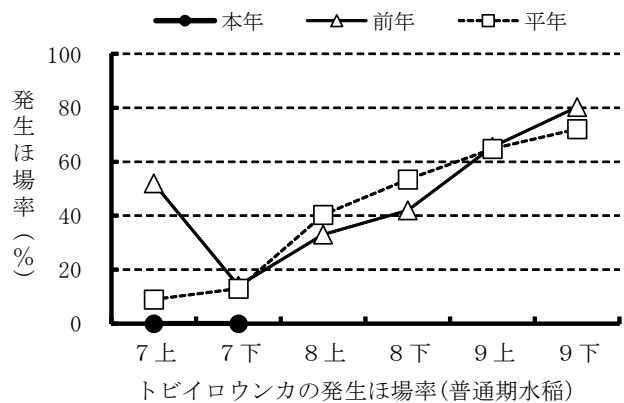
ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 予察灯等による誘殺は認められていな

いが、7月10日にセジロウンカの顕著な飛来が認められた（表1）。また、同日、熊本県でトビイロウンカの初飛来が確認されたことから、これを発生経過予測の起算日とすると、第1世代成虫の羽化時期は8月9日～13日頃と予測される（図1）。

この時期（8月9日～13日）を中心に水田での発生に注意し、株元に短翅型雌成虫を認めたら、8月25日～9月5日頃に防除する。

- (イ) 飼料用稲などの育苗箱施用剤を使用していない水田や効果の高いトリフルメゾピリム剤以外の育苗箱施用剤を用いた水田では、生息密度が高まる恐れがあるので注意が必要である。
- (ウ) 粉剤や液剤で防除する場合は、本虫が生息している株元に薬剤が十分届くよう散布する。
- (エ) 薬剤散布に当たっては、農薬の使用基準を遵守し、薬剤の飛散防止に努める。



(4) コブノメイガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率6%（平成23%）
：やや低い－
フェロモントラップでの6～7月の誘殺
数は85頭（2020年1099頭，2019年232頭）
：少（－）

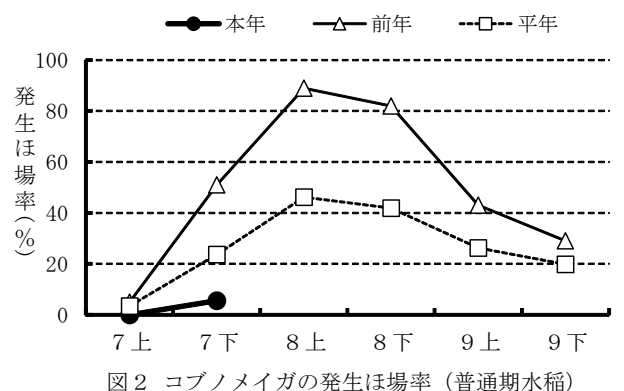


図2 コブノメイガの発生ほ場率 (普通期水稲)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 7月7日と7月17日を発生経過予測の起算日とすると、第1世代成虫の発蛾最盛日は8月7日頃と8月16日頃と予測される（表1，図1）。粒剤による防除は発蛾最盛日頃，粉剤または液剤による防除は，発蛾最盛日の7～10日後に行う。

- (イ) 本虫に効果の高いフェルテラ剤以外の育苗箱施用剤を用いている水田では，被害が発生する可能性があるため，特に注意する。

表1 予察灯等におけるウンカ類及びコブノメイガの誘殺状況

農業開発総合センター内（南さつま市金峰町，2021年）

日付	60W予察灯(水田)						ジョンソントラップ			フェロモン	100W水銀灯(畑)			
	南さつま市			さつま町			南さつま市							
	セジロウンカ	トビロウンカ	ヒメビウンカ	セジロウンカ	トビロウンカ	ヒメビウンカ	セジロウンカ	トビロウンカ	ヒメビウンカ	コブノメイガ	セジロウンカ	トビロウンカ	ヒメビウンカ	コブノメイガ
6/1	0	0	0				0	0	0	1	0	0	0	0
6/2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/3	4	0	0				1	0	1	3	0	0	0	0
6/4	0	0	0				1	0	0	0	0	0	0	0
6/5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
6/6	0	0	0				0	0	0	1	0	0	0	0
6/7	0	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
6/8	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/9	1	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
6/10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/11	0	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
6/12	0	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
6/13	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
6/14	1	0	0				0	0	0	0	1	0	0	0
6/15	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/16	6	0	0				0	0	0	0	7	0	0	0
6/17	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/18	10	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
6/19	4	0	0				2	0	0	0	0	0	0	0
6/20	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
6/21	0	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
6/22	3	0	0				1	0	0	1	0	0	0	0
6/23	0	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
6/24	0	0	0				0	0	0	2	0	0	0	0
6/25	4	0	0				0	0	0	1	0	0	0	0
6/26	0	0	0				0	0	0	4	0	0	0	0
6/27	9	0	0				1	0	0	0	0	0	0	0
6/28	2	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
6/29	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
6/30	36	0	0				1	0	0	0	7	0	1	0
6月計	96	0	0	5	0	0	8	0	1	16	17	0	1	0
7/1	6	0	0	13	0	0	0	0	1	0	2	0	1	0
7/2	58	0	1				1	0	0	0	17	0	2	0
7/3	18	0	0				0	0	0	1	1	0	1	0
7/4	0	0	0	7	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0
7/5	1	0	0				0	0	0	0	0	0	1	0
7/6	0	0	2	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
7/7	0	0	0				0	0	0	2	0	0	0	0
7/8	0	0	0	2	0	0	7	0	0	6	1	0	1	0
7/9	3	0	1				6	0	0	0	8	0	0	0
7/10	100	0	2				5	0	1	4	4	0	0	0
7/11	86	0	2	302	0	0	6	0	0	0	2	0	0	0
7/12	0	0	0				0	0	0	0	2	0	0	0
7/13	4	0	1	15	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
7/14	2	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
7/15	0	0	0	3	0	0	3	0	2	0	0	0	0	0
7/16	2	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
7/17	0	0	0				0	0	0	1	0	0	0	0
7/18	1	0	0				0	0	0	2	2	0	0	0
7/19	0	0	0				0	0	0	2	1	0	0	0
7/20	0	0	0				0	0	0	8	0	0	0	0
7/21	0	0	0				0	0	0	6	0	0	0	0
7/22	1	0	0				0	0	0	1	0	0	0	0
7/23	0	0	0				0	0	0	30	0	0	0	0
7/24	0	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0
7/25	0	0	0				0	0	0	4	0	0	0	0
7/26	0	0	0				0	0	0	1	0	0	0	0
7/27	1	0	0				0	0	0	0	0	0	1	0
7/28														
7/29														
7/30														
7/31														
7月計	283	0	9	344	0	2	28	0	5	69	40	0	8	0
6~7月計	379	0	9	349	0	2	36	0	6	85	57	0	9	0

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率23%（平年35%）：並
糖蜜トラップでの誘殺虫数（7月上中旬 16頭（平年 170頭））：やや少（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。
- (イ) 薬剤散布後も幼虫の発生量が多い場合は、2～3週間後に追加防除を行う。
- (ウ) 老齢幼虫が多くなると食害の進展が急速に進むので、防除時期を逸しないよう注意する。

ナカジロシタバ誘殺状況（農業開発総合センター大隅支場 糖蜜トラップ）

月旬	本年	平年	R2	R1	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	H22
7上	0	92	13	5	27	0	191	455	3	90	69	73	1
7中	16	78	15	16	27	7	222	312	10	56	85	37	73
7下		107	73	44	305	83	337	67	18	14	29	105	21
7計	(16)	277	101	65	359	90	750	834	31	160	183	215	95

注) ()内の数値は7月上中旬の合計、平年はH23～R2の平均値。

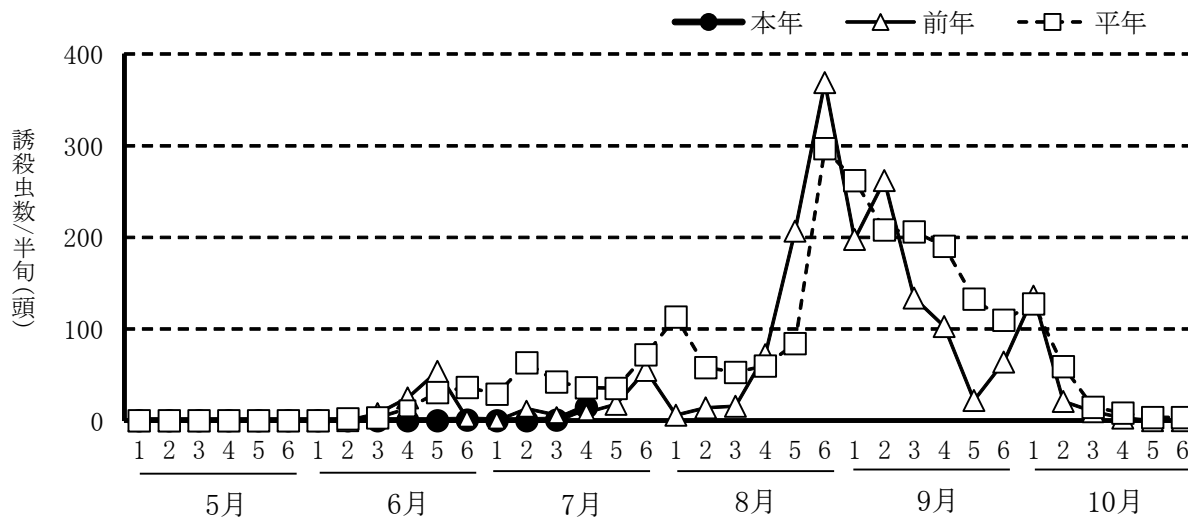


図1 糖蜜トラップでのナカジロシタバの誘殺状況
調査場所：農業開発総合センター大隅支場（鹿屋市串良町細山田）

注) 調査データは半旬毎に集計した。

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床：子苗）

（1）炭疽病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 並

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：並

発生ほ場率13%（平年11%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

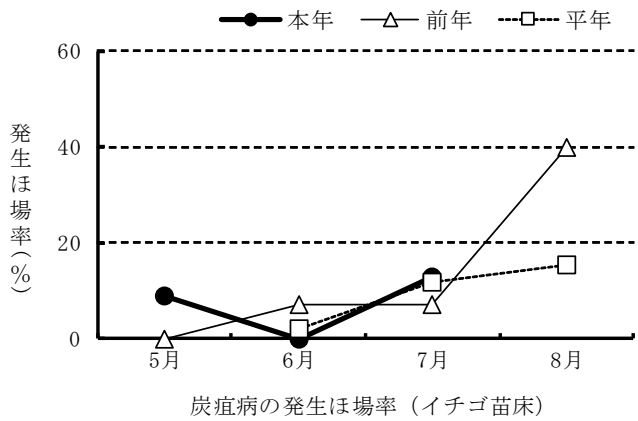
（ア）苗は十分な間隔を置いて並べ通風を

図り、過湿とにならないように適切な水管理に努める。

（イ）生育不良の親株や萎凋した苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。また、それらに隣接している株についても併せて処分する。

（ウ）薬剤による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

（エ）同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



（2）ハダニ類

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 並

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：並

発生ほ場率13%（平年22%）：並

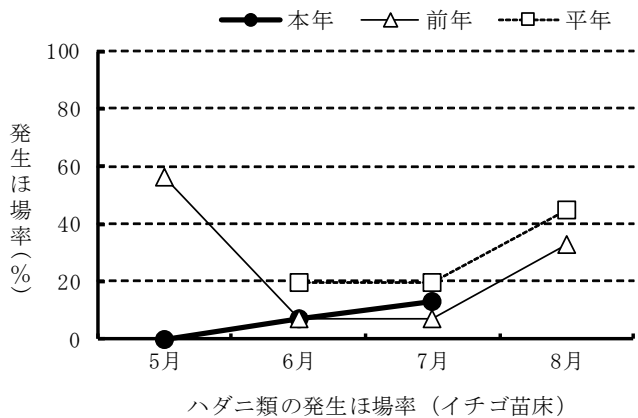
ウ 防除上注意すべき事項

（ア）下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

（イ）薬剤の防除効果をもとめるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

（ウ）薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。

（エ）同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. イチゴのチバクロバネキノコバエ（チビクロバネキノコバエ）

平成30年12月に本県で初めて本虫による被害が確認された（平成30年度病害虫発生予察特殊報第6号参照）。栽培期間中の防除は困難なことから、本ぼへの侵入を防ぐために、以下の防除対策を徹底する。

- （1）未熟な堆肥を施用すると成虫を誘引し産卵を促すので、完熟堆肥を施用する。また、有機物を含む基肥を施用する場合には十分に土壌混和する。
- （2）ほ場周辺部に古株などの植物残渣、野積みの堆肥がある場合には、発生源になりやすいため、周辺の衛生に留意する。

2. サトイモ

(1) 疫病（令和3年度技術情報第11号（7月5日付け）参照）

ア 予報内容

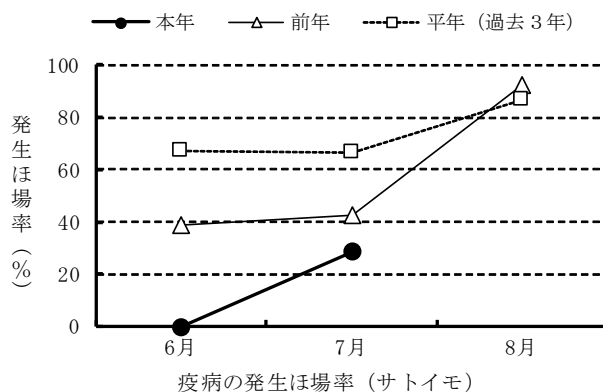
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率 28.6%
平均発病株率4.6%，平均発病度1.6

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病は、ほ場の額縁部分から初発がよく見られるので、ほ場をこまめに観察し、早期発見に努める。
- (イ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、定期的予防散布に努める。
- (ウ) 発生を確認したら直ちに治療効果のある薬剤を7日間隔で複数回散布し、防除を徹底する。
- (エ) 発病茎葉は発生源になるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。



(2) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

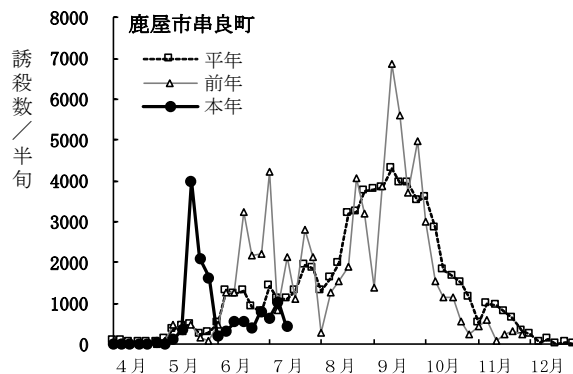
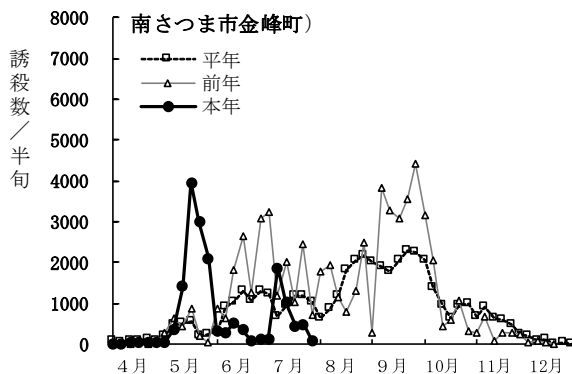
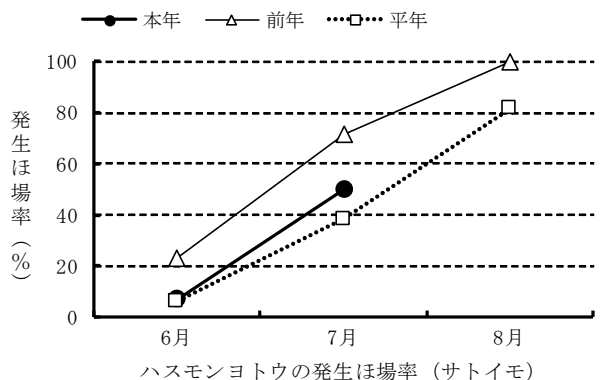
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 やや多
発生ほ場率50%（平年36%）
：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。ふ化後の若齢幼虫は集団で食害し、葉が白変するので、発生を目安にする。
- (ウ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップでのハスモンヨトウの誘殺数推移

Ⅲ. 花き（キク）

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率20%（平年45%）：少（-）

発生程度の高いほ場を認めた（+）

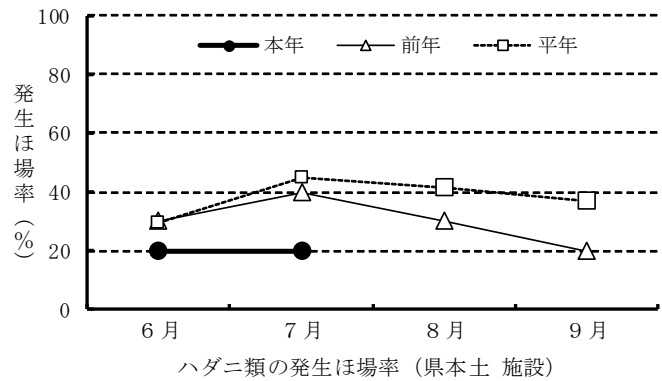
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率50%（平年28%）

：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介する。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウィルス感染に細心の注意を払う。

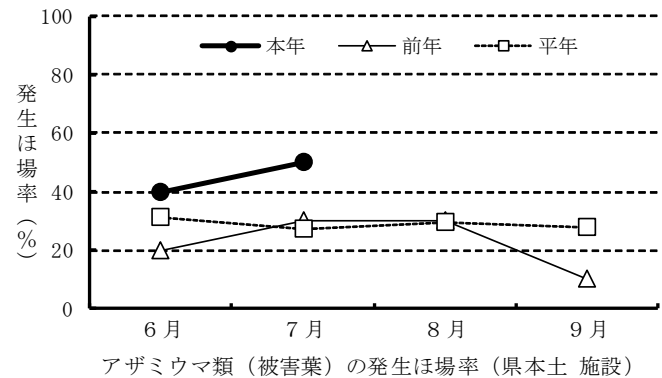
(ウ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。

(エ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。

(オ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや多

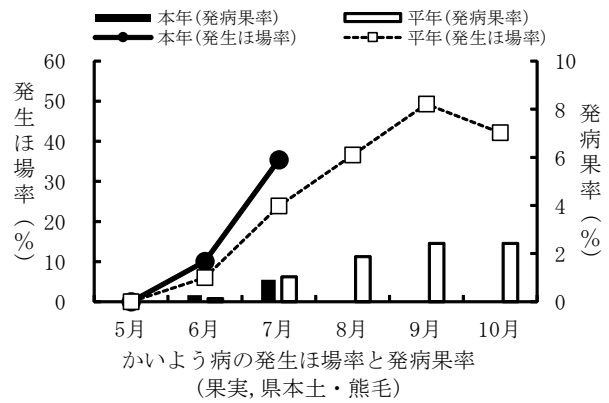
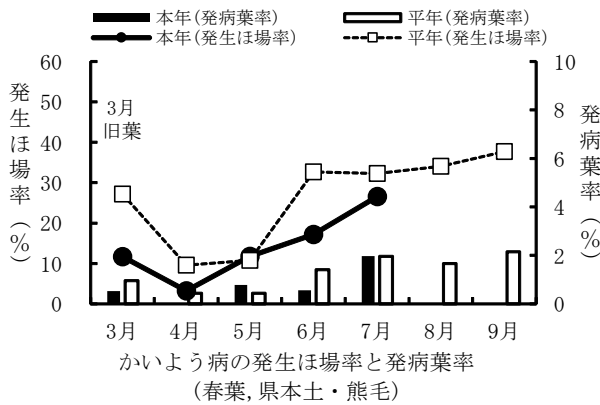
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや多
発生ほ場率	27% (平年 32%) : やや低い (-)	35% (平年 24%) : やや高い (+)
発病率	2.0% (平年2.0%) : 並	0.9% (平年1.0%) : 並



ミカンハモグリガの発生ほ場率80% (平年70%) : やや高い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	14% (平年 16%) : 並	14% (平年 14%) : 並
発病率	0.1% (平年0.3%) : 並	0.3% (平年0.4%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

(イ) 台風の風傷害により発生が多くなることが予想されるので、台風前の防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 38% (平年 23%)

: やや高い (+)

発病果率 1.2% (平年 3.0%)

: やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

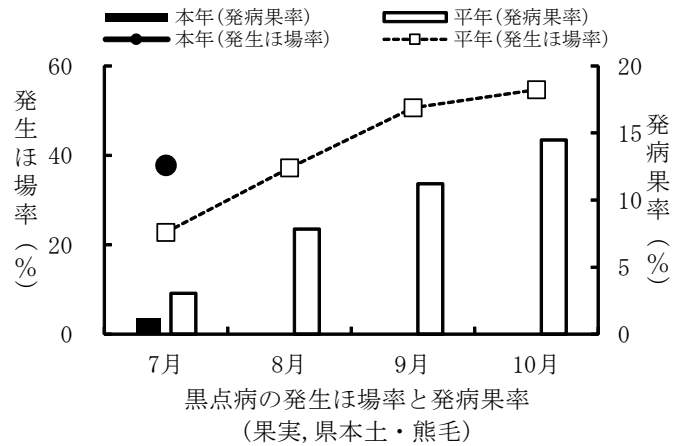
発生ほ場率 0% (平年 1%) : 並

発病果率 0% (平年 0.01%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤の残効は降水量と散布後日数の影響を受ける。このため、次回の散布は累積降水量250～300mmに達する時期を目安に行う。ただし、累積降水量がこれより少なくても1か月程度経過したら次の散布を行う。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 31% (平年 24%)

: やや高い (+)

寄生葉率 6.3% (平年 4.5%) : やや高い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

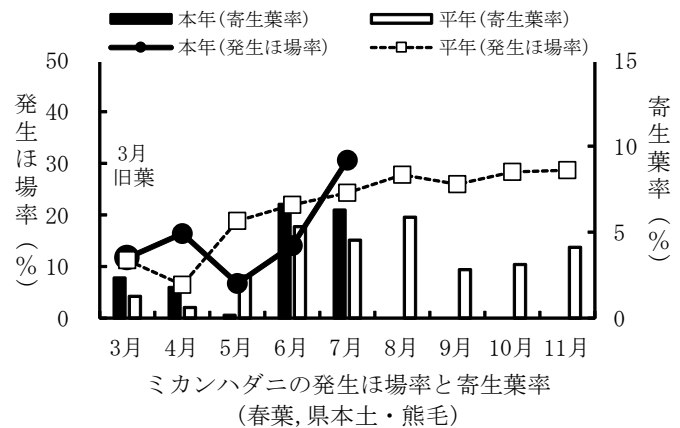
発生ほ場率 0% (平年 4%) : やや低い (-)

寄生葉率 0% (平年 0.4%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5～1.0頭(寄生葉率で30～40%)を目安に防除する。

(イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。



防除に関する今月の留意事項

1. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類 (ツヤアオカメムシ, チャバネアオカメムシ)

ア 予察灯での誘殺虫数は, 平年よりやや少ない (表1, 図1)。各予察灯での最新の誘殺虫数はホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/kagoshima>) を参照。

イ 餌植物 (ヒノキ) 球果の吸汁痕数 (口針鞘数) は, 7月後期で1.1本/果と平年並みであった (表2)。ヒノキ球果の加害が進むと口針鞘数が増加し, 餌として適さなくなると餌植物から離脱し果樹園等へ飛来する恐れがある。

ウ 果実が吸汁被害を受けると, カンキツでは果汁が抜けてスポンジ状となったり落果する。ナシでは奇形果や果汁が抜けてスポンジ状となる。

エ 飛来を認めたら直ちに防除し, 薬剤は比較的残効の長いネオニコチノイド系薬剤または合成ピレスロイド系薬剤を選択する。合成ピレスロイド系薬剤は, ハダニ類の発生を助長する可能性があるため, 散布後はハダニ類の発生に注意する。

オ 防除にあたっては, 薬剤の使用回数や使用時期に注意する。

表1 予察灯の誘殺虫数, 7月第1～4半旬の合計 (単位: 頭)

調査地点	ツヤアオカメムシ		チャバネアオカメムシ	
	本年	平年	本年	平年
南さつま市金峰町	2	272	9	509
いちき串木野市湊町	0	62	3	97
出水市美原町	4	752	3	1,917
鹿屋市串良町	12	51	8	24
誘殺虫数	やや少 (-)		やや少 (-)	

注1) 平年は, 2011年～2020年の10年間の平均。

注2) 予察灯の光源は, 南さつま市金峰町は水銀灯100W, 鹿屋市串良町は捕虫灯20W, 他は捕虫灯40W。

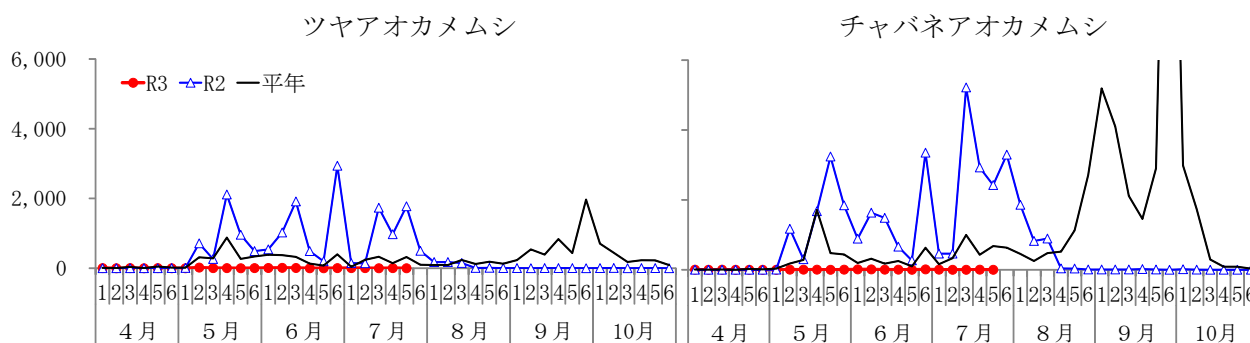


図1 出水市美原町の予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

表2 ヒノキ球果の吸汁痕数 (口針鞘数) の推移 (単位: 本/果)

	7月		8月		9月	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
本年	0.0	1.1				
平年	0.3	2.6	6.0	10.0	14.7	19.5

注3) ヒノキ球果の採取は, 7月前期は7/8～9, 7月後期は7/26～27に県内8地点で実施。

7月後期の各地点の口針鞘数 (本/果) は, いちき串木野市:0.7, 阿久根市①:0.1, 阿久根市②:0.9, 出水市①:1.2, 出水市②:4.7, さつま町:0.0, 霧島市:1.5, 曾於市0.1。

注4) 平年は, 2011年～2020年の10年間の平均。

V. 茶 樹

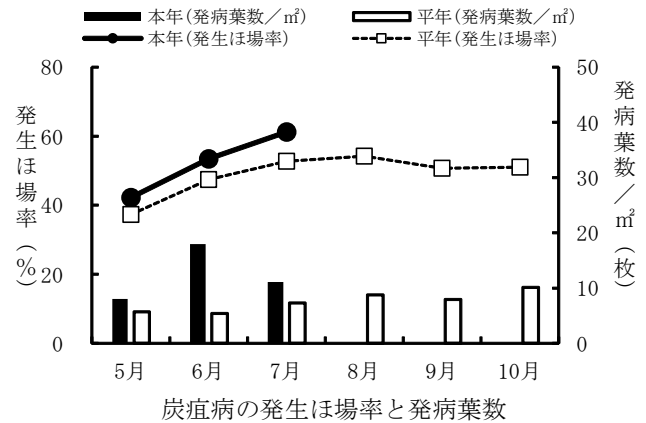
(1) 炭疽病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
 発生ほ場率61%（平年53%）
 ：やや高い（+）
 1㎡当り病葉数11.1枚（平年7.3枚）
 ：やや多（+）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生源となる病葉が少なくても、秋芽生育期に降雨が続くと発生しやすいので注意する。
 (イ) 秋芽萌芽期～1葉期は予防効果のある薬剤で、3葉期は治療効果の高い薬剤で防除する。
 (ウ) 降雨が続き、防除時期が遅れた場合は3～4葉期に予防剤と治療剤を混用して防除する。

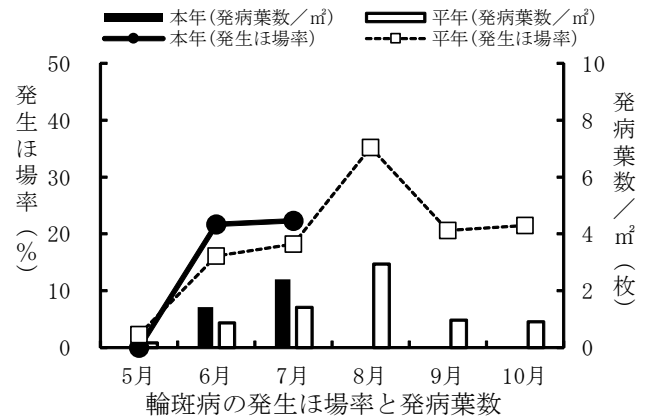
(2) 新梢枯死症（輪斑病菌による）

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 並
 (ウ) 感染時期 秋芽生育前期（8月）
 (エ) 発生時期 秋芽生育後期

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量(輪斑病)：並
 発生ほ場率(輪斑病)22%（平年18%）
 ：並



1㎡当たりの病葉数(輪斑病)2.4枚（平年1.4枚）：やや多（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 二・三番茶摘採残葉に輪斑病の発生が多く、秋芽萌芽期～3葉期に降雨が多いと多発するので注意する。
 (イ) 炭疽病との同時防除が可能である。

(3) 網もち病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 多
 (ウ) 感染時期 秋芽生育期
 (エ) 発生時期 10月

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
 発生ほ場率7%（平年2%）：高い（+）
 1㎡当たりの病葉数0.2枚（平年0.03枚）：多（+）
 前年10月の発生ほ場率15%（平年7%）：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。
- (イ) 更新園であっても、周辺に発生源があると多発する恐れがあるので、防除を行う。
- (ウ) 炭疽病との同時防除が可能である。
- (エ) 炭疽病に耐病性があり同病の防除を行わない場合、「あさのか」など本病に耐病性が弱い品種では発生に注意する。
- (オ) 常発園では、3葉期の防除に加えて、9月上旬も防除する。

(4) チャノコカクモンハマキ、チャハマキ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ やや少
チャハマキ 並
- (ウ) 発生時期 チャノコカクモンハマキ 早い
チャハマキ 早い

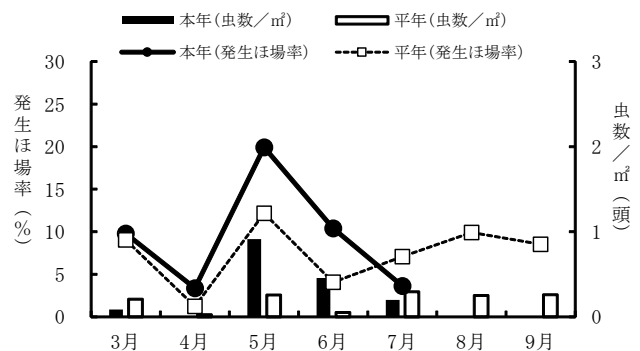
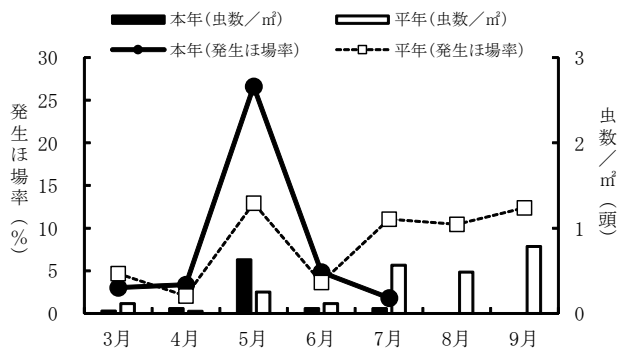
イ 予報の根拠

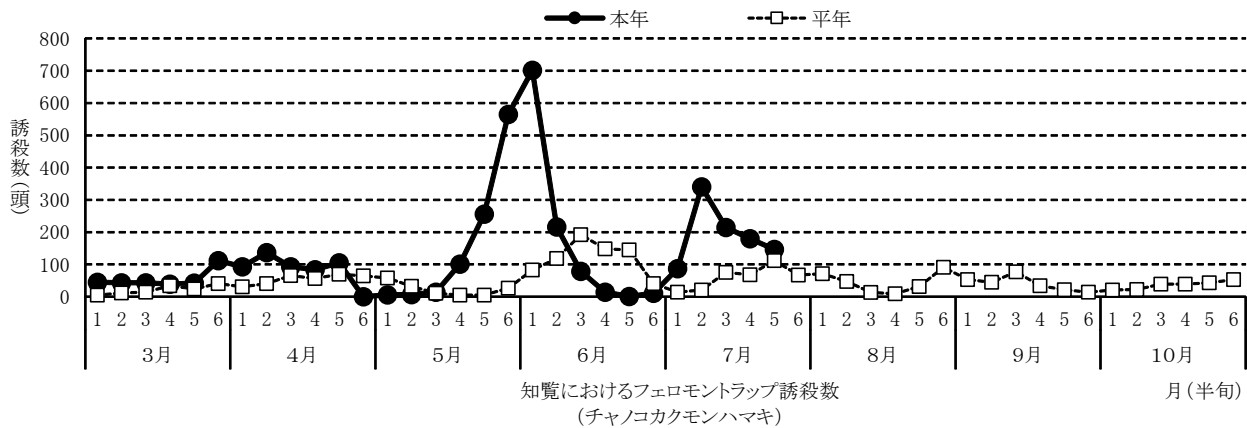
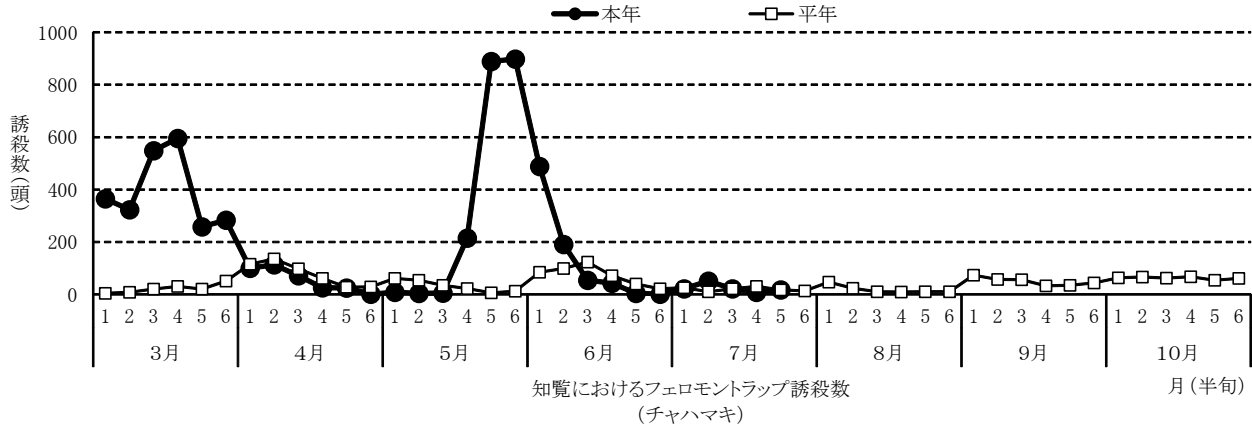
(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	やや少	並
発生ほ場率	2% (平年 11%) : やや低い (-)	4% (平年 7%) : 並
虫数 (1㎡当たり)	0.1頭 (平年0.6頭) : やや少 (-)	0.2頭 (平年0.3頭) : 並
【知覧町フェロモントラップ】		
誘殺数 (6月1半旬~7月5半旬)	1,992頭 (平年1,019頭) : 多 (+)	903頭 (平年548頭) : やや多 (+)
第三世代の発蛾ピーク	早い	早い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤防除を行う場合、防除適期はふ化～2齢期（発蛾最盛日の10～15日後）である。
- (イ) 近年、秋期に発生が多い傾向にあるので、今後の発生動向に注意する。





(5) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並
- (ウ) 発生時期 やや早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並

【巡回調査】

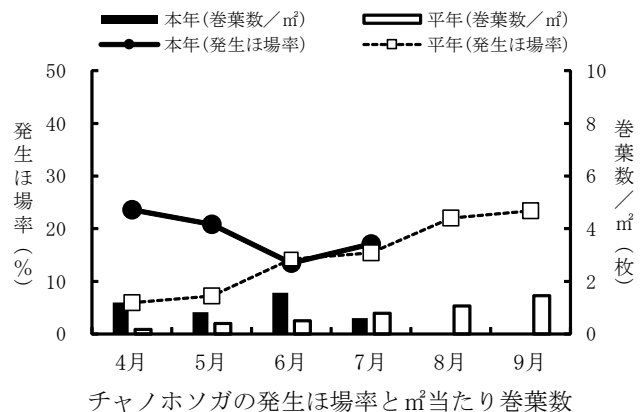
発生ほ場率 17% (平年15%)：並
 m²当たり巻葉数 0.6枚 (平年0.8枚)
 ：並

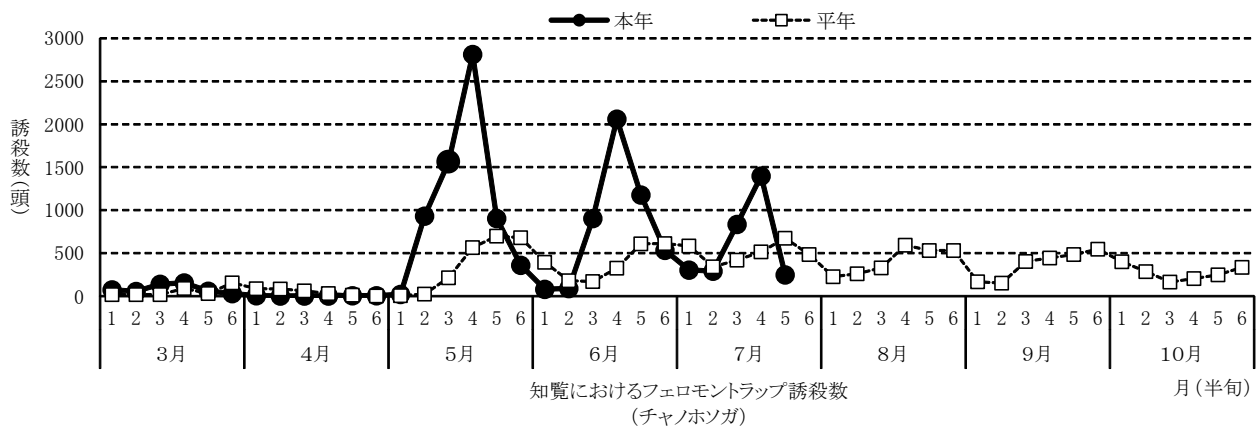
【知覧町フェロモントラップ】

誘殺数 (6月1半旬~7月5半旬)：7,936頭 (平年4,838頭)：やや多 (+)
 第三世代の発蛾ピーク：やや早い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、適期防除に努める。
- (イ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。





(6) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 並
チャノキイロアザミウマ 少

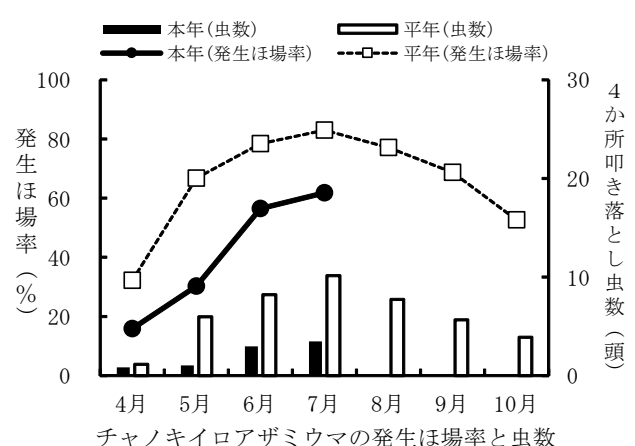
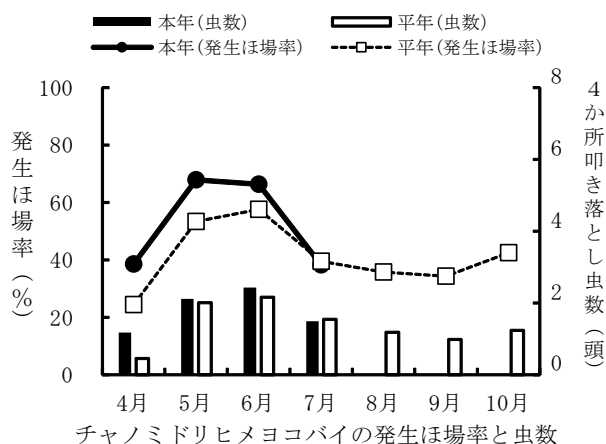
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	並	少
発生ほ場率	38% (平年 39%) : 並	62% (平年 83%) : 低い (-)
虫数(4か所叩き落とし)	1.5頭(平年1.5頭) : 並	3.5頭(平年10.1頭) : 少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 秋芽での被害は翌年の一番茶への影響が大きいので発生園では防除する。
- (イ) 晴天が続くと多発する場合がありますので注意する。また、更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いので被害が継続すると樹体への影響が大きい。



(7) カンザワハダニ

ア 予報内容

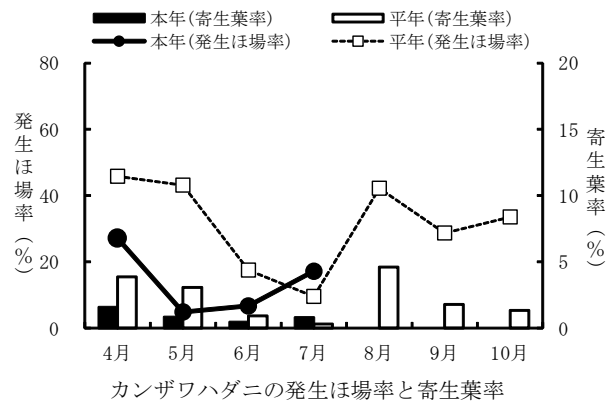
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率 17% (平年10%)
：やや高い (+)
寄生葉率0.8% (平年0.3%)：多 (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 天敵の活動が活発になる時期なので、天敵に影響の少ない薬剤を使用する。
- (イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがあるので注意する。



防除に関する今月の留意事項

1. チャトゲコナジラミ

県本土全域で発生がみられ、一部で多発ほ場も確認されている。

- (1) 幼虫は葉の裏のみに寄生し、裾部と葉層下部に寄生が集中することから、防除薬剤は葉裏まで十分にかかるよう10a当たり400Lの散布量で丁寧に散布する。また、裾刈りは本虫の除去効果と薬剤の葉裏への付着性が高まり、効果的である。
- (2) 天敵のシルベストリコバチに影響の少ない薬剤の使用に努める。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。